

巻 頭 言

長野県透析研究会会長 上 條 祐 司

長野県透析研究会誌は2019年第42巻より印刷による発刊を取りやめ、電子ジャーナル（オンラインジャーナル化）として発刊することとなりました。昨今、様々な学会誌が紙媒体による発刊から、電子ジャーナルに移行しつつあります。紙媒体の学会誌は、それ自体に趣もあり、また手元があればすぐに見ることができる、という利点もあるのですが、ずっと保存しておくには場所を取ってしまうこともあり、結局は何年か経つと廃棄されてしまうことが多かったのではないかと思います。現在、長野県透析研究会のホームページ上で、過去の長野県透析研究会誌をアーカイブとして会員にむけて公開していますが、かなり昔の透析研究会誌については、長野県透析研究会事務局にも保管しきれておらず、欠番が存在してしまっているのが実情です。また個人の論文も、現在は電子ファイルとして各自で保管するのが一般的になっております。このような時流もあり、長野県透析研究会としては、未来に向けて、いつでも研究業績が参照できるように、またずっと後世にも残るようにするために電子ジャーナル化することを決断致しました。何卒ご理解のほど、よろしくお願い申し上げます。

2019年には、医師が透析医療の中止を提示し透析医療を取りやめたことで、透析医療を継続すればまだまだ予後が見込めた血液透析患者さんが死亡に至った事例が発覚し、大きな社会の関心呼びました。現在、この事例に対しては否定的な意見が多いように思われますが、一部に許容するような意見も見受けられます。この事例の背景には、透析患者数がいまだ増加し続けていること、透析医療は高額であり日本における医療費の増大に透析医療が大きく影響していること、また透析患者の高齢化が進み認知機能も含め身体状況が難しい患者さんが顕著に増えていること、などの数多くの問題が存在し透析医療が大きな社会問題になりつつあるという現実があります。透析医療は多くの腎不全患者の命を確実に救ってきた偉大な医療技術であるのですが、透析医療のお蔭で多くの患者さんが長期間生き残れるようになった結果、元々国力のあった日本であってもそのような多くの患者さんを受け入れる余裕が徐々に無くなりつつあり、社会の意識が変わりつつあるという状況が皮肉のようにも思われます。

今後、透析医療技術の向上を目的とした研究のみならず、透析医療をどのようにしていくべきか倫理的側面も含めて多くの議論が必要になると思われれます。我々透析医療に関係する従事者としては、弱者である透析患者さんたちが社会的に切り捨てられていけないように、透析患者さんの尊厳を守れるように、透析患者さんが抱く真の希望を叶えられるように、議論を重ねていく必要があるように思われれます。

今後、長野県透析研究会誌が、医師・看護師・臨床工学技士・栄養士・薬剤師等々の様々な領域の医療者からの意見を取り上げ、活発な議論を重ねられる場になっていくことを祈念致します。

今後とも、よろしくお願い申し上げます。